二次読みについて

一次読みでは、ひとつひとつの文に書かれたことがらを絵にし、きもちにすることができた。しかし、それで、すべての映像化・感情化ができたというわけにはいかないだろう。なぜなら、一次読みでは、もっぱら、その文に書かれたできごと・ありさまを明らかにしていくのであって、場面・文脈上の意味づけ、文脈の関係から生じる新しい意味づけなどについては扱いきれないからである。作品の世界は、一文一文に描かれたことがらを機械的に組み合わせてできたものではなく、その組み合わせのなかで新しい世界をつくりながら膨らんでいくものだと思う。

そこで、二次読みが必要となる。二次読みでは、「登場人物の行動の意義づけ」や、「象徴的なことばの表現性」を主に扱うことになる。それらは、ひとつの文のなかで読みきれるものではなく、場面や文脈のなかで新しい意味づけをうけとった文として存在する。

つまり、一次読みのような読みでは読みきれないものだ。

吉永正広氏は、「文学作品の読みの指導過程」のなかで、次のように二次読みを位置づける。

『二次読みの指導過程への位置づけは、「形象の知覚の段階」のくりかえしの読みであり、一次読みで獲得された「描写形象」を基盤に、表現形象を読むことだ。

登場人物の「行動」の意味や、象徴的なことばの「表現性」などを、形象の組み合わせ・構造のなかからとらえ、知覚していくしごとといってよい。

一次読みでは、ことば・文を手がかりに、そのようにえがかれているものごとを、まずきちんと映像化していく。映像化はすなわち感情化だ。

たとえば、登場人物の行動は、できごととしてまずとらえられるだろう。

だが、かれの行動は、きっと、なんらかの意味をもっている。その行動の意味は、かならずしも行動を正確に映像化・感情化したことによって、すべてがとらえられるというわけではない。

人物の行動や場面によって直接描かれていないで、それらの積み重ねや相互作用、つまり「形象の構造」が表現をつくりだしている…。

一次読みの後に、一次読みを基盤にした一次読みとは質の異なった「形象の知覚」のもう一つの段階がいる。

実践的には、読み切れなかったところをもう一度読み返す、というたちばで展開される場合がある。

象徴的な意味をになうことばの表現性をとらえるしごとは、二次読みでもおそらくその最終段階に位置づけられるだろう。題名もこうして位置づく。

二次読みは、作品の「形象の体系」にしたがって展開される。』

そこで、その読みの方法として、一次読みでは禁句にしてきた「なぜ？」という問いを二次読みで使うようにしてきた。「なぜ？」という問いに対してのこたえは、他との関係づけを必要とする。「なぜ、○○は～したんだろう？」と問えば、文脈や場面のなかでそのこたえの糸口を探さざるをえなくなる。また、象徴的なことばの表現性についても、「なぜ、こう書いてあるんだろう？」と問うことで、その表現性の意味を、場面・文脈のなかでさがすことになる。

しかし、やみくもに「なぜ？」を問えばいいということにはならない。場面・文脈上、新しい意味づけを受けるところはどこなのかをはっきりさせなくてはならない。ここに、読み手の力量がためされることになる。実践的には、一次読みのなかでわからなかったところというのが二次読みの対象として残っていくのだが、一次読みで読めたつもりになっているところでも、文脈をたどっていくと、新しい意味づけを受けるところもある。そういったところをはっきりさせるだけの指導者側の力量をつけなくてはならない。

ところで、「なぜ？」という問いで注意しなくてはならないことに、「クイズゲーム」に陥る危険性があるということがある。「なぜ？」は一般的には原因・理由を問うものであり、論理を問題にする問いであるだろう。そのため、子どもたちが作品のことばから離れて、頭のなかだけで論理を組み立てて理由づけをする危険性をはらんでいる。そのため、二次読みでも一次読み同様、ことばを手がかりにすることを忘れないように注意しなくてはならない。

また、「なぜ？」の問いによってえられた中身から、「なるほど、そういうことだったのか。」と発見できるところがある。つまり、場面・文脈のなかにおいて新しく意味づけられた文によって、その他の関連ある文（登場人物の行動）が新しく意味づけられる。

ぼくたちは、このように二次読みを位置づけ、研究・実践を進めてきた。

ただ、ぼくたちは、以前から、二次読みも読みには違いないのだから、ことばから離れてはならない、ということを自分に言い聞かせてきたのだが、一方で、二次読みを「形象と形象の関係がつくりだす新しい形象を読むこと」という位置づけをしてきたために、自分流の創造をすることが多くあった。つまり、「連想ゲーム」のように形象をつないでいく傾向にあるのだ。そこには、ぼくたち自身がいみきらっている主観読みが幅をきかせている。

また、形象と形象の関係を問題にするということで、方法的に、登場人物の行動を場面のなかで意義づけながら、文脈にそってたどっていくような「読み」を進めることもある。こうなると、二次読みというよりむしろ分析なのではと指摘されることもある。つまり、二次読みとも分析ともつかないような中途半端なことをやってきたのが実態だ。

「二次読みは繰り返し二次だ」という吉永氏の指摘は重要だ。一次読みでは位置づかなかったところや一次読みが終わってから場面・文脈的に新しい意味づけを受けるところを、始めからたどって読みなおすというものだ。あまり難しく考えないで、このように「繰り返し二次」の立場で進めるのが、もっとも簡単で効果的な読みなのかもしれない。

このように、ぼくたちのサークルでも二次読みについては、いまだ十分な定義と方法が確立されているとはいえない。しかし、多くの実践的な指針も示されている。ここでの二次読み資料にあげている内容と方法も、二次読みとはどうあることなのかを追求したひとつの姿でもある。

ところで、ここ最近のなかでもっとも新しい二次読みについての論文に、奥田靖雄氏の『二次読みのこと』というのがある。そこには、次のような指摘がある。

『…言語のくみあわせのなかに、まるごとの人間が形象化されている、ということになる。人間が諸側面へ解体されることなく、まるごとのすがたが具体的な形象として言語のくみあわせのなかにさしだされているのである。そうであるとすれば、文学作品の読みは、てっとうてつび、くみあわされた言語のなかに、場面のなかで行動する具体的な人間のすがたをおいもとめてゆかなければならない。

表現されている形象にしても、その表現の手段をことばにもとめることによってのみ、はじめて手にふれることのできる存在になる。言葉という存在の形式によってのみ、観念の世界は対象化されているのである。

一次読みでは、ことば、具体的には文とその構成要素である単語の、言語的な意味にしたがって、読みすすんでいく。ところが、この文と単語とは、場面あるいは文脈のなかではたらくことで、その場面あるいは文脈のとの関係のなかであたらしく意味づけをうけとるのである。あらゆる動作がそうであるように、意味づけは言葉行為にもつきまとう本質的な特徴である。そして、この意味づけが表現された形象として二次読みの対象としてあらわれてくるのだろう。

表現もまたことばを手段につくりだされているのであれば、文のどのような側面、構成要素がその表現をになっているのか、文に使用されている、文をくみたてている言語的な諸手段の言語学的な分析がもとめられることになる。

文の構文論的な構造、
文のなかにはいりこむ単語や慣用句、これらを文にまとめあげる文法的な諸手段、
あたえられた文を先行する文に論理的につなげてゆく接続詞、
段落における文の役わりを明示する、文末の諸手段、
相手へのはたらきかけを表現する終助詞、
イントネーション、
はなし手の現実にたいする態度をいいあらわすモーダルな諸手段
などがあって、これらの正確な言語学的な分析をおこなわずには、文の意味をとらえることはできないのである。

…場面、文脈との関係のなかで選択された、語彙的な、あるいは文法的な諸手段は、その表現的な価値のうえにあたらしく文脈・場面的な意味がうわのせされることになるだろう。
こうして、読み、なかんずく文脈や場面のなかで文の意味を読みとっていく二次読みは、使用のなかにある言語の言語学的な分析になってくる。』

この指摘はきわめて重要である。

文学作品のなかでは、文・単語は場面あるいは文脈のなかではたらくことで、その関係のなかで新しく意味づけを受け取る。この新しく受け取った意味づけを表現した形象が二次読みの対象であるというのだ。この難解に思える指摘は、実は、ぼくたちが文学作品を読んでいくなかで日常的に経験していることだ。「あそこで、ああ書いてあったのはこういうことだったのか。」「あの時の言い回しは、こういう意味があったんだ。」と、あとで思うことがしばしばある。それは、文学のような言語作品だけでなく、映像作品でも同様のことがある。そこにあらわれた姿をとらえるだけでなく、そこに込められた新しい意味づけをとらえていくのだ。文学作品の場合は、必ず、その意味づけを受けるべく選択された表現方法がある。それが二次読みの対象だ。ぼくたちは、それをかぎつける力量を持たなければならないだろう。そして、その読みは「言語学的な分析」によって成り立つ。決して直感や感覚によるものではない。もしそうであったとしても、その証拠は言語学的な分析によらなけらばならない。

こうして、文学作品は二次読みのなかで、新しい意味づけをもった形象が立体的な存在になることができる。案外、文学を読む楽しさは、二次読みにあるといえるのかもしれない。文学好きの大人の読み手は、知らぬ間にそうした読みをしているのではないだろうか。

この資料集が、そうした方向に少しでも近づけていることを願っているのだが、まだまだ学習不足で、十分にその内容を伝えているとは言えない。ただ、はっきりしているのは、こうした読みを保障するのは、確かな言語の力だということだ。経験的な力でなく、科学的な言語の力によってこそ、豊かで確かな読みに到達することができる。その力を、少しでも子どもたちに獲得してほしいと願っている。

以上が麦畑の場面での二次読みだと思っているところだ。一次読みの中身も多くはいっているので、どこが二次読みなのかと思われるかもしれないが、最初の教材分析とあわせて読んでいただけたらと思う。

ところで、麦畑の場面以外のところでの二次読みになりそうなところはどこになるだろう。案としては、以下の箇所が該当しそうだと思っているが、それが「言語学的分析」に耐えうるかどうかはわからない。ぜひ、先の二次読みを参考に検討していただければと思う。

おじいさんは、／「ほんとに、おまえは　かわいい　やつじゃのう。」／と、いって、その　くびを、だきよせました。／しんぺいくんも、まけずに、／「ほんとに、おまえは　かわいい　やつじゃのう。」／と、いって、その　くびに　だきついて、じぶんの　ほうへ　ひっぱりました。

「まけずに」とは、どういうことか？なぜ、まけずにやっているのか？

ここでは、ただ、おじいさんとしんぺいくんが一緒になって子ウシをかわいがっているというより、しんぺいくんがおじいさんのまねをしながらかわいがっているようすがわかる。それは、「まけずに」という語彙的意味からわかるのだが、ここでは、なんらかの場面・文脈的な新しい意味がつけ加わっていると言ってよいだろう。全体の文脈のなかで、ここの「まけずに」というしんぺいくんの気持ちがどういったものか考えることができればいい。

また、この場面と最後の場面との対比のなかで、気持ちの違いをはっきりさせることもできるかもしれない。（ただ、これは分析の範疇に入りそうだが。）

しんぺいくんは、… 子ウシの　くびに　だきついて、じぶんの　ほうへ　ひっぱりよせました。／おじいさんも、わらいながら、ひっぱりかえしました。

また、この作品では、「あきらめる」ということばが三度出てくるが、それぞれの内容にずれがみられるように思う。「あきらめる」の語彙的意味はどういうことなのか、そして、それぞれの場合、あきらめる対象「～を」にあたるものは何なのかを、文脈のなかで明らかにしていけば、おじいさんやしんぺいくんの気持ちがよりはっきりしてくるだろうと思われる。

①見えなくなると、おじいさんは／「男の　子は、いつまでも、めそめそする　もんじゃ　ない。きっぱり　あきらめるんだ。」／と　いいました。

②…子ウシの　ことに　ついて、いっぺんも、話した　ことが　ありません。／きっぱり、あきらめたからです。

③あきらめた　ような、かおを　して　いた　くせに、やっぱり、…。

さらに、次の箇所も、基本的には一次読みで読めているのだが、文脈のなかでは大きな意味の付け加えがおきているかもしれない。ただ、これも「言語学的分析」というより、作品全体の分析のなかで位置づけられるものなのかもしれない。

でて　きた　男の　子は、だまって、うらの　うしごやへ、つれて　いって　くれました。

この場合「だまって」というのは何を意味しているのか、なぜ「だまって」なのかということだ。本当なら、知らない子が来たのだから、「だまって」ではなく、用件を尋ねたりするのが普通だろう。なのにここでは、わざわざ「だまって」と書いてある。一次読みでは、なんだかへんだなという感じのままで終わっている。しかし、その後で、すぐにそこにおじいさんがいることがわかる。男の子はしんぺいくんが来ることをあらかじめ知っていたということになるだろう。では、なぜ知っていたのか？…これ以上追求すると、書いていないことの想像に陥りやすそうだが、もし、根拠があるのなら、追求してもいいところだと思う。たとえば、おじいさんは間もなくしんぺいくんが子ウシをたずねてやってくることを知っていて、その家の者にあらかじめそのことを伝えていたとか。

さらに、最後の文の表現も「だれに見えたのか」ということを問えば、この作品の終わりを象徴する箇所として、二次読みの対象になることができるかもしれない。つまり、おじいさんとしんぺいくんの心の中をあらわしたものとして。

子ウシは、おじいさんと、しんぺいくんとに、ひっぱりあいされながら、大きな、くろい　目を　みはって、とても　うれしそうに　見えました。

以上が、ぼくたちの考える二次読みだ。

最初に述べたように、ここであつかったことの多くは一次読みでも扱っている。そして、この「子ウシのはなし」の場合では、場面・文脈上の新しい意味づけといっても、ごく近くの文脈を関係づけることでかなり読めてくるような文が多いと思う。それだけに、一次読みでも、かなり読めるように思うし、事実、ぼくたちはそうしてきた。しかし、それがいいのかどうかはよくわからない。

やはり、一次読みと二次読みの関係がすっきりしていないのかもしれない。

また、これをまとめることで、今まで陥ってきた誤りの原因がはっきりしたように思う。

今までぼくたちは、二次読みを「登場人物の行動の意義づけ」と「象徴的なことばの表現の位置づけ」だとしてきた。このことにまちがいないだろう。しかし、「登場人物の行動の意義づけ」という言い方のために、登場人物の行動を追いかけることに夢中になってしまって、その中で、「なぜなんだろう」という問いのこたえを見つけようとする傾向が強かった。つまり、そこでは、言語学的な分析はなおざりにしてきたようなところがあった。だから、二次読みだといいながら、分析に近いものになったのだ。

ただ、それは、ぼくたちが一次読みを丹念に一文一文、一単語一単語を大切に扱ってきたために、二次読みで取りあげることの多くを扱ってしまっていることにもよるのかもしれない。もちろん、かなり広い文脈・場面との関係で新しい意味づけを受ける文・単語もあるのだろうから、一次読みでカバーできるはずはないのだが。

二次読みの対象は、奥田先生のことばをかりて、「場面・文脈との関係のなかであたらしく意味づけをうけとった文・単語」とさせた方がいいかもしれない。そうすれば、すっきりするし、文や単語から離れる主観的な読みに陥りにくくなる。

また、このように定義すれば、「なぜ」の問いも明確になる。「なぜ」は、登場人物の行動に対してのものではあるが、直接的には、その行動を表現した箇所への「なぜ」になる。たとえば、「しんぺいくんは、なぜ、わらってみせたのか」という場合、その行動というより、「わらってみせました。」の「みせました」という表現に焦点を当て、「わらったりほほえんだりしたのではなく、なぜ、わらってみせたのか」ということになるのだ。そうすれば、「わっらてみせる」という言語学的な分析に向かわざるをえなくなり、その結果として、「わらってみせた」行動の意義づけをすることになる。それは、文脈あるいは場面によって新しく意味づけされたものになるに違いない。

また、今回は「象徴的なことばの表現性の位置づけ」のような箇所は取りあげることができなかった。ただ、「象徴的なことばの表現性」については、「なぜ」という問いはふさわしくないかもしれない。「象徴的なことば」については、「これで何がわかる?」とか「これは何を意味しているんだろう?」とか、「こう書いてあることで何がわかる?」とかといった問いになるだろう。しかし、この問いかけは、読みというより分析に近いものかもしれない。今回はこのことにふれていないので、今後の課題となるものである。

強調しておきたいこと、それは、二次読みも読みである、ということである。

（文責　佐菜　信也）